

*訳は、意識または、要約であり、文献などに引用される場合は、オリジナルの英文を参照ください。そして、引用の場合は、必ず、正式な引用のフォーマットに従い、出典を明らかにしてください。

目次

ディレクターより	5ヶ月追加!	From the Director.. Five more months!	2
ボンエアでの忙しい日々		Busy on Bonaire	3-6
本紹介 世界のオウム		Book Review - Parrots of the World	7
真似のミステリー		The mystery of mimicry	8-11
アクロン動物園が WPT を表彰		Akron Zoo honours WPT	11
オウムの行動とトレーニング DVD		Parrot behaviour and training DVD	11
オオハネナガインコの生体数を調査 2006		Cape Parrot big birding day	12
高等法院、UK のペットマーケットに判決		High Court rules on UK pet markets	13
自由に飛ぶこと		In my opinion... Free flight	14
大変なコンゴウインコ (訳なし)		Macaws amuck	15-16
シタニュース		Psitta News	17
パタゴニアイワインコの絵販売		Patagonian Conure painting for sale	18
オウムの展示 (訳なし)		The Parrot in Art exhibition	18
US オフィスの事務からのお知らせ		A note from the US Administrator	19
WPT 一般情報		WPT general info	19
野生のオウム		Parrots in the wild	20

Cover Picture By © SAM WILLIAMS 表紙の写真

キボウシインコ(*Amazona barbadensis*)のペアが、フサから種を取り出している所。WPTは2つの博士学のリサーチプロジェクトをボンエアでサポートしている。2006年は、食べ物が多く、いくつかのツガイは、3羽、または、4羽のヒナを育てるのに成功している。

From the Director... Five more months! ディレクターより 5ヶ月追加!

ブリュッセルの委員長に沢山のカードを書いていただいて有難うございます。(これは鳥インフルエンザを防ぐため、EUでの野鳥の輸入禁止を決めた委員会の委員長に、輸入一時禁止へのお礼のカードを送るというプロジェクトです。詳細は前回のシタシーンを参照してください)。委員長の事務所から、お礼の手紙を期待してはなりません。しかし、我々のカードは、我々の気持ちどおり受け取ってもらえたと確信しています。すばらしいニュースは、このカイプリアノ氏は、また、禁止を延長し、今回は、2006年12月まで、5ヶ月もの延長になりました。パロットソサエティ UK が出版したマガジンには、彼らのメンバーに行ったアンケート結果が載せられています。その中の質問に、「(野鳥の)輸入禁止を支持しますか?」というのがありました。74.9%が支持し、8.6%が支持していませんでした。その後、RSPBが、調査の専門家を雇い、メンバーだけでなく、一般の人にイギリスとドイツで野鳥貿易に対する姿勢を調べました。どちらの国でも、92%が、野鳥をペット貿易のために捕まえることに反対し、イギリスでは1%、ドイツでは2%の人達だけが、野鳥捕獲に賛成する結果がでました。どちらのアンケートでも、一般には皆、ペット貿易の禁止をサポートすると望んではいましたが、(とにかく、野鳥をカゴに入れることをいいと誰が思うでしょうか?)、これほど、いい結果がでるとは思っていませんでした。このいいニュースに加え、イギリス獣医協会(British Veterinary Association)が、EUへの野鳥輸入禁止を永久的なものにすることを支持することにしました。このような力があり、専門家の集まりである団体がこのような発言をすることはまれであり、そして、重要であります。(UKメンバーができるプロジェクトの提案を書いた文はここで省略いたします)

Busy on Bonaire Research begins on Bonaire's Lora

ボンネアでの忙しい日々 ボンネアのオウムに関する研究始まる

By SAM WILLIAMS and ROWAN MARTIN サム ウィリアムス と ロワン マーティン

キボウシインコ(*Amazona barbadensis*)の調査のために、私がボンネアと呼ばれるカリビアン島の島を初めて訪れたのは2003年だった。これは、主にWPTから助成金を得、アメリカとイギリスにあるアマゾン協会

(Amazona Societies) とパロット協会 (the Parrot Society) からの寄付も受けたものだ。野外調査によって、このオウムを保護するには、多くの問題に取り組まなくてはいけないことはわかっているが、ボンネアの人々が「自分たちに出来ることは何でもする」というと言ってくれるのはいい知らせだ。(2004年2月号 Vol16で、過去の研究を参照)。2003年の研究の後、私の友人アンドリュー ベッカーマンと共に、保護活動を目的にしたリサーチをするにはどうしたらいいかを考えた。そして、彼と共に、イギリスのシェフィールド大学にリサーチ職を設立した。私は現在、博士号取得を目指している所で、私の研究は、このボンネアでオウムの個体群を制限している要因を調べることに焦点を置いており、将来の保護活動に生かすため、オウム達がどのような問題に直面しているかを調べることにある。今回は、ロワン マーティンというイギリスからの研究者と一緒に、このアマゾン種を WPT の支援によって行う。我々の研究は、別なものだが、互いに助け合うことによって、よりよい成果が得られるだろう。ロワンの研究は、オウムの一雌一雄制と雄と雌の役割を調べる。鳥の中で、社会的な一雌一雄制に対する性的な一雌一雄制は、実際のところ、珍しい。

キボウシインコの個体群は、いくつかが離れて存在する。その中の一つが、カリビアン南部のボンネアにある。我々の研究は、実際、2005年の10月に始まっている。2006年の繁殖期は、野外における3期間のうちの最初のものとなる。野外研究をしていない間は、イギリスのシェフィールド大学にいる。WPTは、以前、ボンネアのアマゾン(ボウシインコ類)に関わっていた。2002年に、違法で捕まったオウムの放鳥を行った(シタシーン 2003年2月号参照)。2003年には、サムが、WPTの援助によって、ボンネアまで渡り、オウムたちの置かれている状況を調べ、島の人々とのつながりを作り上げた。我々の現在のプロジェクトは、この最初の訪問がきっかけとなって生まれた。イギリスの援助団体である自然環境リサーチ委員会と共に、WPTからの以前から続く援助にとっても感謝している。WPTの援助によって、車を買うことも出来た。これにより、車を借りるお金を節約できる。WPTのヤシオウムのロゴがドアに書かれている車を見れば、現地のコミュニティーも、我々がどれほど真剣に、このロラ(現地では、オウム一般をそう呼ぶ)を保護しようとしているかわかるに違いない。クラカオにある、カリビアン生物多様性リサーチ、マネージメント(CARMABI)基金も、この車を買うのに協力してくれた。

What's limiting Loras? ロラ達を制限しているものは何か?

*ロラ=現地の人が、オウム一般を指して呼ぶ呼び方 By Sam Williams サム ウィリアムス

他の動植物と同様、オウムたちはエコシステムの一部であり、そのエコシステムの中の他の種の影響で個体群のサイズは、バランスを保たれている。ボンネアのオウムたちは、様々な要因で影響を受けている。それらは自然によるものだったり、人間によるものだったりする。何が最大限の影響を与えているのかを知れば、それが将来の保護活動に生かされる。個体群へ与える自然による影響の例は、競争、病気、そして、敵である。生息地破壊と外来種は、人間による影響である。殆どの種が直面する一般の影響に加え、ペットとして求められるオウムたちの場合は、捕獲に脅かされる。ボンネアのキボウシインコにとって、これらは、深刻な要因である。なぜなら、他の大型のオウムと同じように、キボウシインコは繁殖率が低い(一般の小鳥などと比べて)。その上、島が小さいので、島の個体群自体が小さい。

ボンネアには400羽ほどの野生のアマゾンパロットがいると考えられ、それらは1952年から法律で守られている。オウムが法律で守られているにも関わらず、違法捕獲は続き、島内だけでも600羽の鳥が飼われている。現在では、捕獲は以前ほどではなくなったが、以前は、個体群にかなりの影響を与えた。ドブネズミや攻撃的なオオウロコツグミモドキ(Margarops fuscatus)が、巣を離れたての若鳥に悪影響を与える。私は、オウムの成長過程で、どの時期に何が一番影響を与えているのかを見ていくつもりだ。今までに、いくつかの卵が生まれるのか、何羽のヒナが孵るのか、ヒナは巣立てるのか、そして、巣立てないなら、なぜなのかを見てきた。我々が見てきたヒナの殆どには、バンド(足輪)がつけてある。足輪をつけることによって、巣にいるヒナであれ、成鳥であれ、オウムが巣立ったり、成鳥になったりする成功率を知れる要素を監視することが可能になる。我々が知っている繁殖期のオウム達が、岸壁に巣を作るのは、多分、オウム達が巣を作れる程の大きさの木の殆どは、チェーンソーによる穴が空いているからだ。捕獲者たちは、ヒナを巣から取るために、木に直接穴を開けた。したがって、巣の調査は、崖からロープでぶら下がることとなる。巣の穴が深く、入り口が小さいため、ヒナを穴から出すのは、簡単ではない。ひしゃくのようなもので、ヒナを掬い、手で届く所まで持ってくる。それでも、腕をすっぽりといれなければ届かない。ヒナが、取られたりしたりしていないかを見るだけでなく、彼らの成長や、寄生虫などのチェックもする。ロワンと私は、鳥たちの

DNAについて見てみるのにも関心がある。私は、個体群の中での遺伝のバリエーションと同系交配のレベルを調べるのに興味がある。これらの要因は、長期的な種の生存に影響する。

私の今年のリサーチ目的のもう一つは、オウム達が何を欲しているのかを知ることでもある。我々は、彼らがどこで餌を取り、どこで巣を作り、そして、何羽かがどこで眠るのかも知っている。しかし、彼らはどうして、そこを選んだのだろうか？この質問に答えるために、私は、島中にある多くの地域で、生息地のアセスメントを行っている。これを行うために、オウムの重要な餌場などを観察している。それに加え、ランダムに選ばれた20の場所を、それらのオウムの重要な場所と比べて違いを調べている。生息地の特徴として、植物の種類、割合、食べ物のあるなし、そして、構造（木の大きさなど）である。各場所にいる間、私は、そこで見かける鳥や動物を15分間数えることにしている。

私は、特に、サントメインコの亜種である、この地にしか分布しない *Aratinga pertinax xanthogenius*、オオウロコツグミモドキ、そして、外来種であるムクドリモドキ *Troupial (Icterus icterus)*—これは、時にオウムと餌を争うのだが—に興味がある。外にいることが多いため、色々なものが見れる。例えば、ノブタが1mくらいの所にいたり、カラカラが餌を取っているところとか、目印のためにつけたピンクのリボンを見に来たハチドリなどを見かける。9月にイギリスに帰るときまでには、オウムの必要なものと繁殖に成功した情報を多く集められることを望む。遺伝関係を調べるために採集した血液のサンプルも持ち帰る。そのためには、崖からロープにぶら下がりヒナを調べると同じくらい大切な、研究室でのテクニックも多く学ばなければいけない。どちらの方が好きになるか、する前からわかっている気もするけれど。

A day in the field. 野外での一日 By Rowan Martin ロワン マーティン

崖の端につかまり、反対側にある巣の入り口にテレスコープの焦点をあわせて待つ。ここからは、下方にあるキャニオンで、餌をさがしたりしているロラ達が見える。一羽のオスが鳴き、その声は風化した岸壁の間をこだまする。メスはそれに答えるように巣に卵を残したまま巣を離れ、木に止まり、オスから餌をもらう。メスは餌ごいをし、餌やりが始まる。その間に、私は必死になって、どの鳥が何をどの鳥に、いつしているのかを必死に記録する。どうして一定のペアは、他のペアよりも、ヒナを育てるのがうまいのかについてのヒントになるものが得れることを期待して。私の研究の目的には2面性がある。一つは、ロラの繁殖生物学について情報を得ること。島全体で、あらゆる場所で、多くのペアを追っている。そして、これは、地元での保護活動に役立てられる。我々が学んだことは、なぜオウムは一雌一雄なのか、そして、それが、繁殖率にどう影響するのかを理解するのに役立つ。

今日も、いつものように、ワクワクしつつも、イライラする。各ペアは、まったく違う行動をする。彼らのことがよくわかったと思ったとたん、彼らは違うことをする。違う鳴き方、いつもと違う時間、または、違うペアが状況をかきまわしたりする。今回のことに限って言えば、先ほどの、餌をあげていたオスと、餌をもらっていたメスの餌やりは中断されてしまった。もう一つのペアが近くにとまり、鳴き始めたからである。最初のオスは餌やりを止め、鳴き返し、キャニオンの中にこだまが響く。この状態がエスカレートしていくと、ツバサをはばたかせ、尻尾を振る行動に移る。彼らの鳴き声は、低くなり、もう一つのペアをめぐって飛び掛り、ペアが飛び去ると、自分も谷の下に行く。メスは巣に戻る。きっと、いつもよりは、お腹がすいているに違いない。これらのかかわり合いを見るのは興味深い。オスとメスの判断と、お互いにどうやって関わっていくのかは、どのペアの繁殖が成功するのかを決めるのに重要な要素になりえる。

この朝は、サムと私は、巣を調べるために、崖から紐でぶら下がった。以前、4つの卵があったのに、今は3つになっていた。その代わり、一羽のヒナが孵っていた。我々は、同じようにして、他の、卵の数が多い巣も調べていった。少し前の季節によく降った雨が、親鳥たちに多くの卵を産ませたのかもしれない。もちろん、ヒナが多く孵れば、それだけ、仕事も増えるわけで、これは、親同士がどう関わるかにも影響する。各ペアの意思決定が違うことは、繁殖の成功率に影響を与え、それを観察するのは興味深い。来月は、ボンネアでの次の世代をたどっていくのが楽しみだ。そうこうしているうちに、日が沈み始めた。先ほどのオスは、30分ほど、巣の近くに止まっている。彼は、すべてが順調にしていることに満足しているようで、優しい一声を発すると、谷の上の方へと飛んで行き、今日の寝床へと戻るのだ。本日最後の記録を終え、テレスコープをしまい、寝泊りする場所へと戻る。明日は、違うペアを追うために、日が昇る前に出発する。

我々が情報を整理し、次のシタシーンに書くときは、我々が何を発見し、これらのヒナはどうなったのかをお知らせしたい。

キャプション:

サムとロワン (左) ロラ プロジェクトの車と共に。車は、WPT の援助によって購入された。

アマゾンのペアが飛び立つところ。

赤外線カメラでは、母親鳥が餌を分ける所が見れる。

巣は多くの場合深いので、ヒナを取り出すのは難しい。”魔法のひしゃく“と集中力を必要とする。

アマゾンのペアが、巣で、尻尾を広げるディスプレイをしている。

ヒナは寄生虫のチェックをされ、体重と体長を測られる。

好条件のオウム生息地で、巣を見つけようとしている。

ヒナは、赤外線カメラで監視される。

オウムのペアが、繁殖期が始まると共に、羽づくろいをしあう。下のほうの鳥が、もう一羽の指を軽く噛んでいるのに注目。

Parrots of the World - an Identification Guide 世界のオウム—識別ガイド

By Roger Wilkinson ロジャー ウィルキンソンによるレビュー

この本はジョー フォーショー (Joe Forshaw) によって編集され、フランク ナイト (Frank Knight) によってイラストが描かれている。これは、ジョー フォーショーによって書かれ、ウィリアム クーパー

(William Cooper) によってイラストが描かれたクラシックの「世界のオウム達」(Parrots of the World) とは違う。この「世界のオウム—識別ガイド」は、野外と屋内での識別に役立つように編集されている。屋内とは、美術館、鳥類飼養関係、野生動物取締りスタッフなどを含む。この本は、オウムの種と亜種の描写とイラストを含む。鳥類飼養関係者は、亜種の識別に注目するかもしれない。ここでは、亜種として分けられているものは、一般では、種として扱われているものもある。イラストは、クーパーのに比べると、それほど、素晴らしいとはいえないが、今風のフィールドガイドのようなものだといえる。ユニークな特徴は、多くの種の飛翔時の、お腹と背中への描写である。

体と翼の一方しかないイラストは、経済的かもしれないが、鳥全体を描いたものに比べると見栄えはよくない。120 のカラープレートからなる。この本を通して、保護活動がテーマになっている。カラープレートの見開きには、各種のイラストの簡単な描写説明がある。そして、その後、成鳥と若鳥の詳しい説明が続く。分布地図とその説明があり、IUCN のレッドリストと CITES のステータスもある。IUCN のステータスは、時々刻々と変わるので、最新の情報は、IUCN レッドリストサイト(www.redlist.org)で確認のこと。

この本のいい点は、オーストラリアのオウムの亜種が含まれていることである。ちなみに、ヤシオウム調べてみると、4つの亜種に分けられていた。他の本では3つの亜種である。カラープレートを見て、もっと詳しく知るために、説明のページへ行こうとするが、プレートには、説明のページは何ページなのかが書いていないのが不便である。種の説明の欄では、「その他の呼び名」「分布」「生息地とステータス」「行動」「鳴き声」「似た種」そして、「見れる場所」に別れている。120 ページのカラープレートを含め、76 ドルは、お買い得である。この本は、大きくて、(23 x 31cm or 9 x 12in) 重い (2.2kg) 。だから、外に持ち歩くというよりは、キャンプやロッジサイトを出る前や、戻ってから調べるのに使われるだろう。しかしながら、この本は、博物館、鳥飼育場、動物園、空港の税関などでは、識別するのに難しい種のために役立つであろう。我々のオンラインストアでも、近日手に入るようになる。

The mystery of mimicry 真似のミステリー

By JACK BRADBURY and THORSTEN BALSBY ジャック ブラバリーとソーステン バルスビー
Cornell Lab of Ornithology

レベルの違いはあるにせよ、殆どすべてのオウムが何らかの音をまねることができる。この能力と知能が、オウムの人気の理由なのだが、この能力をオウム達は、自然界でどのように用いるのだろうか？

1992 年から、この疑問に答えようと、コスタリカのグアナカステ保護地区 (Conservación Guanacaste (ACG)) で、4種のオウムを研究してきた。4種は、ミドリインコ (Brotogeris jugularis), メキシコインコ (Aratinga canicularis), コボウシインコ (Amazona albifrons), キエリボウシインコ (Amazona auropalliata) である。

方法

オウムの声帯コミュニケーションを調べる方法は、小鳥のそれとは違ってくる。多くのオウムは、木の高いところにいるので、彼らを追い続けることは難しい。違法捕獲がよく行われているところでは、オウムは、人々を恐れるため、彼らの近くにいくのが難しい。この4種は、はっきりしたテリトリーを持っていないようなので、そこに毎日戻って調べると言うこともできない。オウムが木に止まるとき、座るようにとまるので、足輪を見ることも難しい。ラジオトランスミッターで追いかけるのには、範囲が広すぎるのと、その鳥のパートナーが、羽づくろいなどをすると、壊してしまう可能性があるのも問題だ。しかしながら、このACG地区は、オウムの研究に向いている。この地域のオウムの個体群は、比較的保護されている。植物群は、低く、開けている。そして、ACGのスタッフは、とても協力的だ。この地域の種のレパトリーについて、かなり学んだので、彼らの呼び声を再生し、彼ら呼び寄せ、彼らに印をつけることも出来る。パン アメリカン ハイウェイがACG地区を2分しており、おおくの古い農場も、ラジオトラッキングや巣の探索そして、レコーディングを容易にさせてくれる。そこで捕まえられた鳥達は、印をつけられ、施設の鳥小屋に5-12日ほど保管され、その声を記録する。我々のいる場所は、オウム達がよく行き来するので、捕まえられた鳥と、外の鳥が鳴きあうのを録音することができる。8つのマイクとラップトップコンピューターが、どこから鳴き声が聞こえてくるのかを示してくれるので、どの鳥が出した音なのかがわかる。オスとメスの区別がつかない種は、血液のDNA調査によって、家族構成を調べる。

日常生活と声帯に関する行動形式

ACG地区のオウム達は、繁殖期外では、同じ日常を繰り返す。日が昇ると、皆で寝ている場所から離れ、小さな群れで餌を探す。昼間は、遊んだり、休んだりしてから、また、餌を探し始め、また、集まって、暗くなると眠る。コボウシインコは、ペアか小さい家族で日中の間行動し、小さな3種は、その種だけで集まり、餌を探し、休み、寝る場所へと集まる。小さな群れが一つに集まる時、または、群れから小さな群れが離れる時に、よく鳴く。木に止まっているものたちは、飛んでいる同種の鳥達を呼ぶために鳴く。眠る前に集まる大きな群れは、決まったものではなく、小さいグループへと別れていく。そして、次の日にまた集まるとき、鳴き声のやり取りは、重要な役割を果たす。

研究している4種はすべて、集まって寝る。その中で、キエリボウシインコは、ACGで、決まったねぐらの場所を持つ。我々の調査する場所の一箇所は、每晚30年以上使われている。その他の3種は、ある場所を3-6週間使い、そして、全く違う所へ移動する。大抵、何キロも離れたところである。何年かして、同じ場所に戻ってくることがあるにしても、予想できるパターンはない。この3種は、日が落ちる最後の2時間ほどを、ショーのようにして過ごす。ここで夜を過ごすのだということを、飛んでいる鳥に知らせる声帯のコミュニケーションが行われる。普通、何箇所かで、このショーが行われるが、結局、他のものがあきらめ、一箇所に集まることになる。人気のある場所では、この声帯のコミュニケーションが行われるが、これは、ステータスの優劣を示し、より安全な、つまり、ねぐらの中心地へいける働きがあるのかもしれない。このショーは、近くの木で行われることが多く、最終的なねぐらで行われることはない。時間が来ると、ショーを行っていた木から、ねぐらになるもっと葉が茂っている木へと移動する。あれほど沢山のインコ達が、一本の木に集まるのは、見ごたえがある。150羽のインコ達が、高さが5-6メートルほどの小さい木に集まるのを見たことがある。これらの3種のインコたちは、暗くなるまでに集まり、静かになるが、時々、最初のねぐらから、いきなり飛び立ち、空を何分か旋回することがある。そして、ショーがまたあり、同じようにねぐらに集まる。これが起こるとき、天敵を近くに見たことはないので、一羽がいい場所を探そうとして飛び立ったのが他の鳥達を怖がらせる結果になって起こるのかもしれない。キエリボウシインコは同じ場所を使うから、彼らは、このような集める行動を起こすことがない。しかしながら、違うペアの間で、いい場所をとる為に、ペア間で、声帯のコミュニケーションが行われているのを観察したことがある。

メキシコインコの「チー」という鳴き方

メキシコインコは、大きな声でチーと鳴く。これは、飛んでいる時や、仲間を集める時、ペアが離れて呼び合う時、仲間どうしが集まったり、離れたりする時に使われる。研究用に捕獲した個体は、個別のチーを持っているようである。鳥は、その他の鳴き方もするが、独自のチーを70-90%の割合で使う。飼われているセキセイインコ達は、ペアのオスが、メスの鳴き方を真似し、呼び合うが、メキシコインコの場合は、個別のチーがあり、相手のそれを真似ることは殆どない。仲間同士が集まる時に、このチーが使われるので、録

音したものを、通り過ぎようとする群れにスピーカーから聞かせてみた。群れが止まり、我々に反応すれば、我々は、もう一度同じチーを流した。半分ぐらいの群れしか、我々とのコミュニケーションをしなかったが、した者達は、これを30分ぐらいにわたり、何百回と繰り返した。コニユア達は、独自の鳴き声を持っているため、他の鳥や、よそ者の鳥が、群れの中で見分けられたり、よく見えない状態の時、他の鳥の鳴き声を真似ることができる。しかしながら、野生のコニユアが、鳴き声を交換する時、出会いを確かにするだけのためには、長すぎる。我々が使った一種のチーを繰り返し流す方法は、自然のものとは全く同じではない。自然では、鳴き声を交換するに当たって、すこし長くした部分をまねて、長くしたり、突然パターンを変え、それを相手が真似したり、真似しなかったりする。えさを探している鳥達が、ぶらぶらしているところを見たことがない。突然、飛び立ったり、目的があるように飛び立ったりする。ということは、群れの中にリーダーがいて、どこへ行けばわかっているようである。しかしながら、2つの群れが、合流するとどうなるのであろう。大きな群れ同士がコンタクトを持つときも、ある一定の鳴き声しか観察できなかったことから、ある一定の者だけしか関わっていないのではないかと思われる。これらが、リーダー達で、合流した後、誰が、グループを引っ張っていくのかを交渉しているのではないか。

その他のなき方と、その他のオウム種

我々は、メキシコインコの鳴き声のタイプと、「チー」の呼び合いを観察し、それから、真似の証拠を見つけた。しかしながら、接触を持つときが真似の始まりで、それが、主な理由ということではない。その他にも、多くの研究者達が、違った種類のオウムの声帯模写について室内と野生で研究している。我々の研究によって、将来、声帯の真似についてのミステリーが解けることを望んでいる。それには、神経学的にどうやって真似をするのかとか、人間が真似をする時と脳の仕組みが同じなのかなど、さまざまな問題が出てくる。これについて、もっと詳しいことは、こちらのサイトでどうぞ。

http://www.acguanacaste.ac.cr/loras_acg/parrots.home.html

Akron Zoo honours WPT アクロン動物園、WPT を表彰する

毎年、アクロン動物園（アメリカ、オハイオ州）は、4つの団体を、“地球のチャンピオン”賞に選ぶ。これは、野生動物や保護活動にいい影響を与えた者への賞である。2006年は、ワールドパロットトラストが、すべてのオウム達のために、世界中の保護活動のために働いているということで“地球のための、グローバルチャンピオン”に選ばれた。

Parrot Behavior and Training DVD オウム行動とトレーニング DVD

このDVDは、バーバラ ヘインダーリックによるシリーズの最初のもので、ポジティブ レインフォースメント トレーニングやどうやって問題のある行動を解決できるのかを教えてくれる。

イギリスとアメリカで販売中。アメリカ\$21.50（郵送料込み）イギリス£14.95（郵送料込み）

オーダーはこちら: worldparrottrust.org or parrottrustusa.org (US flag)

Counting Capes オオハネナガインコの生体数を調査する

2006 Cape Parrot big birding day BY. COLLEEN T. DOWNS

University of KwaZulu-Natal, South Africa（南アフリカクワズールナタール大学）

* 翻訳者 waftin_seaweed さん(ペンネーム)

オオハネナガインコの生態調査も毎年開催しているが、今年で第9回を迎え、Cape Parrot Big Birding Day (CPBBBD)が開かれた。ひどく寒い日ではあったが、調査員らはこのコンディションのもと、大いに助力してくれた。Cape Parrot (オオハネナガインコ)は存続が危ぶまれており、事実過去30年の間にかかなりの個体数が減ってしまっている。この毎年恒例の調査は、自然界のオオハネナガインコの生存数を将来的にも把握しておこうとする目的で始まった。また、この調査は、一般の人々にオオハネナガインコの生存の危機を知らしめ、南アフリカのみ生息する固有種であるオオハネナガインコの保護に協力を促す目的でもある。さらに彼らの生存する森を確保する必要性を強く唱えている。

オオハネナガインコの個体数が減少した要因には、彼らの生息する森の環境の悪化や、餌や巣を確保する場所の不足などが挙げられる。その結果繁殖の成功率が低下し、他にも、飼育目的やペット取引を目的とした捕獲、嘴や羽が冒されるウィルス性疾患、天敵による捕食により、その個体数が脅かされている一要因となっていることも否めない。

今年 は 282 人のボランティアの人々が 103 の観測地点で調査を行った。合計 1108 羽が当日の午後にカウントされ、さらに翌朝 1322 羽が確認された。この数値は昨年 に比べきわめて高い。冷たく霧深い天候にもかかわらず、土曜午後は観測地点の 65% の場所で、日曜朝には 78% の場所でそれぞれ確認できたことになる。年ごとの結果のばらつきや午前と午後に相違がある点については、天候に恵まれなかったり、重複カウントをしていたり、たまたまその日に限って鳥たちがいた場所を見失っていたこともありうる。それでも、ここ何年かはオオハネナガインコの数が徐々に増加しつつあるという好傾向にあり、特に今年 はすばらしい結果を得た。しかし良い傾向にあるとはいえ、オオハネナガインコの生息分布にばらつきがあること、また彼らが yellowwood の森に頼って生息していることの懸念があるため、私たちは手放しにこの結果に喜んではいないのだが、生息状況を監視していくことはとても重要なので CPBBD は継続して調査を続けていくつもりだ。オオハネナガインコがこれからも増加し続けてほしいと強く願うばかりである。

思わしくない側面としては、観測の結果、オオハネナガインコが生息してきた元々の土着の森に適した原産の天然果実が減ってしまっているということが示唆されたことである。今年 のオオハネナガインコは CPBBD が調査対象としている森ではない場所で餌を取っていた。そこには以前はオオハネナガインコの姿は見られなかったし、またいたとしても、何年も寄り付かなかった場所である。なんとオオハネナガインコ達は前年よりも早くペカン園に現れ、完熟する前の外国産のペカンの実を食していたのである。また、ある場所では、タンニン（動物が食すると食欲をなくす成分）を多く含んでいるドングリを地面から拾って食としてきたオオハネナガインコが生息する地域もあった。これらのような森以外の餌場所に多くのオオハネナガインコが集まっていたのである。前回のレポートでも述べたように、生息範囲を調査する上での問題点の一つとして、調査をしていてオオハネナガインコが全く見あたらないということがある。しかし、カウントがゼロだということも、個体の発見と同じく重要な結果である。ある調査員のグループは熱心にも 9 年間調査に参加していただいております、今年 は、オオハネナガインコを一番最初に発見され表彰を受けられた。私の祖父はこの地で育ち、今年 の 9 月には 100 歳になるが、彼が言うには、オオハネナガインコとは元々この地に繁殖しており、どこにでも見られるような普通の種であったのである。<告知>2007 Cape Parrot big birding day 第 10 回 CPBBD は 2007 年 5 月 5 日午後と 2007 年 5 月 6 日午前中に開催されます。ご参加いただける方はこちらまでご連絡ください。 downs@ukzn.ac.za

High Court rules on UK pet markets 高等法院（英国）、UK のペットマーケットに判決

イギリスでは、バードマーケットは、問題にされてきた。これは、オウムに興味のある他の人からペットを飼えるチャンスであり、または、貿易者が、ストレスで疲れ、野生で捕まえられ、安く、そして、病気の鳥を、オウムのことをあまり知らない人にさぼく場所にもなりえるのか？ 法的に現存の規制を再検討されることで、合法性、違法性を明らかにするものだと期待されていた。しかしながら、UK ペットマーケットについては、はっきりした結果が出るのは、何ヶ月、また、何年もかかるかもしれない。この問題について、二人の全く違った立場の人々からの意見を述べてもらった。

By GREG GLENDELL, Hon Director, BirdsFirst

バードファースト (BirdsFirst) 、ディレクター グレグ グレンデル

(注釈：ここでの、ペットマーケットは、ペットフェアなど、ビルの大きな一角を借りたり、広い駐車場のようところで、イベントのようにして、多くの業者が集まり、ペットを売るものを意味しているが、道端で露天のようにして売ることも含まれる)

イギリスでは、すべての動物（脊椎動物）の貿易は、1951 年のペット動物法（the Pet Animals Act 1951）によって規制されている。ペットを売る商売をするためには、貿易者は、ペットショップの免許を地方自治体から得なければいけない。1983 年までは、貿易者が、オウムを含むペットをマーケットで売ることは一般的だった。道端のマーケットで売る者もいた。動物を扱う状態がよくないので、1983 年に、ペットマーケットは法改正により違法になった。「もし、いかなる人が、動物をペットとして、道端や公共の場、マーケットでの屋台や手押し車で売ることがあれば、有罪とされる」 (“If any person carries on a business of selling animals as pets in any part of a street or public place, or at a stall or barrow in a market, he shall be guilty of an offence.”) とその改正された法律にある。この規制にも関わらず、バードショー、または、ペットフェアとも呼ばれる、

バードマーケットは行われ続けている。一箇所に定着せず、渡り歩く貿易者が鳥を売れるよう、公共で鳥を売れることを準備し、支持している主な団体は、「パロット ソサエティ (Parrot Society)」と「ケージと鳥小屋の鳥達 (Cage and Aviary Birds)」である。

信頼できる筋の数字によると、EUでの野鳥輸入一時禁止前の時点では、大きなバードマーケットで売られた50%から70%の鳥が、野生で捕まえられたものだ。ペット動物法は、地方議会では、殆ど規制を実行されておらず、多くが、その場限りで売り歩く貿易業者がペットを売のを止められないでいる。

1990年代に、バードファーストとその他の動物愛護グループが、地方当局はペット動物法の元づく権限があることを確認させることによって、これらの違法バードマーケットを閉めさせようとキャンペーンを始めた。このすぐ後に、アニマル プロテクション エージェンシー (The Animal Protection Agency (APA)) が、このキャンペーンに加わった。その結果、2004年までに、340の自治体のうち、3つだけが、このようなセールスに、いわゆる“免許”を与えるという所まで、制限することができた。

「ケージと鳥小屋の鳥達」(Cage and Aviary Birds)という団体は“免許”を持っており、野性で捕まえられた鳥を加え、100,000羽の鳥を売る。一番最近行われたバードマーケットが、「ケージと鳥小屋の鳥達」によって組織されたのは2003年であった。

2006年、マルコム ヘインズ (Malcolm Haynes) という、スタフォードにあるイギリスで一番大きいバードマーケットが行われる場所の住民が、ペット動物法についての法的見直しを求めた。一時的に、(通常は一日限り)のバードマーケットでペットを売ることについて、そして、スタフォードが、パロット ソサエティに“免許”を与えていることについて、意義を申し立てた。バードマーケットに関する数多くの、驚くべき事実の暴露を行ったバード ファーストとアニマル プロテクション エージェンシーによってこの訴訟は支持された。ペット動物法に基づき、“マーケットは売り手と買い手の集まりーコンコース”だとした上で、ペットをマーケットで販売するのは違法であると、ウォーカー裁判長は、高等法院で、判決を下した。裁判長は、スタフォードもこのようなセールスに“免許”を与える権限はないという判決もくだった。

しかし、ペット動物法の下での違法行為は犯罪でありながら、鳥達を売った者が犯罪を犯したかどうかを調べる法的審査は行われぬ。実際に、裁判長は、我々がずっと信じてきたように、ペットをあのように売るのは違法であるとはっきりと判決を下した。このようなセールスによって得られる利益のため、マーケットを開催する者や貿易者達は、告訴されないよう、あらゆる手段を使ってでも、これらのマーケットを続けようとするであろう。違った場所を渡り歩く売り手が、鳥の福祉などに構っていないのと同時に、この貿易で売られる鳥達がどのような苦しい状態を経て来たかを、一般の買い手も知らない。もちろん、マーケットでの売り買いは、買い手が“バーゲン鳥”を売ることには無知であることに頼っている。このようなイベントで売られている鳥達は、様々な病気を持っている。バードファーストは、実験的な購入として、鳥をこのようなセールスで買い、実際、オウム病を持っている鳥がいた。

2006年2月に、APAはペットマーケットについて Ipsos MORI のアンケート調査を行った。わかったことは、4%しか、このような一日ペットセールスについて支持しておらず、68%は反対していた(その他は、無回答など)。この結果や、明らかな動物の健康や福祉への問題にもかかわらず、イギリス政府は、いわゆる動物“福祉”法案の元で、“免許”制にするべきだという考えに固執している。動物福祉法案によって、鳥の飼い主として、鳥の福祉について懸念するすべての人は、ペットマーケットが、合法化されることに反対することを、下院に手紙を書くべきである。

2000年11月、ペットマーケットに関して、「ケージと鳥小屋の鳥達」(Cage and Aviary Birds) ドナルド テイラーが、その雑誌に以下のように書いた。

「動物たちの権利を思っているということを主張する団体からの邪魔は許さない」
このような言葉は、ペットマーケットを支持する本当の態度を明らかにしている。オウムを愛する人々は、ペット貿易業者達のこのひどい台詞を肝に銘じるべきである。
イギリスのバードマーケットについてのフィルムはここをご覧ください。 www.apa.org.uk/apatv

Bird Keeper, Cage & Aviary Birds Exhibition.

バードキーパー、ナショナル ケージと鳥小屋の鳥達エキシビジョン

By DONALD TAYLOR, Cage & Aviary Birds, ドナルド テイラー ケージと鳥小屋の鳥達

動物の権利保護過激家が吠えたが、ウォーカー裁判長は、ペットフェア（＝ペットマーケット）は、以前より、役所での手続きを少なくし、このままであるべきだという判断を下した。過激家にとって、再審理は、議会が、1951年ペット動物法の改正（1983年）によって、ペット鳥のセールスを公共の場で行うのを禁止するかしないかについてであった。鳥飼養家にとってそれは、過剰な在庫を売りさばき、新鮮な繁殖ストックを仕入れ、古い友達に会い、クラブや協会メンバーシップを更新し、趣味の道具を買い、考えを交換する場についてであった。この問題に対し二つの違った立場が同意した事は今までになかったし、これからはない。そんな心配すらない。判決は、それについて変えることはない。今日の大規模で現代的なペットフェアを、カーブツ セール（規制のない露天）のような道端のマーケットのようなものだと思っている人は、現実からかけ離れられるだけかけ離れている。1983年の改正は、ロンドンズ クラブ ローでの、屋根もない押し車から、衝動買いで買う消費者に子犬が売られていくのを止めようとしたものだ。

私の意見では、それは、適切に規制され、コントロールされた環境で、あらゆる必要性を満たす動物や鳥を提供するイベントのセールスを、ウォーカー裁判長は止めるつもりはなかったものだと思う。彼の判決で、ウォーカー裁判長は、その法律が、ペットは、マーケットでビジネスによって売られることが出来ないと言うことより、現存する法律の後ろにある問題のキーワード、特に、“マーケット”という言葉のを定義づけようとした。マーケットの彼の定義は、フランチャイズマーケット、道端のマーケット、野外または、公共マーケットに限らない売り手と買い手の集まり（コンコース）であり、イギリスのペットフェアのすべてを現在では意味する。結果として、鳥をペットとして売る業者を誰も迎えることができない。しかし、これは、反対者の勝利なのだろうか？ そうではない。なぜなら、ペットを実際に売ったペットフェアは、初めから、殆どなかったし、彼らが売ったのは、繁殖のストックであり、それらは、その後、イギリスの250万人のペット鳥の飼い主のために、ペットを繁殖するのに使われたからである。例えば、一番最近の、パロット ソサエティ UK のセールは、たった2.5%の鳥だけがペットとして分類され、一方で、一番最近のナショナル エキシビションでは、23,000羽が出展されたなかの100羽だけが、ペットとして分類される。ウォーカー裁判長が、ペット鳥をバードフェアで、貿易者が売ることを違法だと判決を下したことで、地方自治体では、貿易者に免許を与えることができない。逆に、これは、地方自治体 環境健康 検査官が、以前、ショー開催者を通して、以前合意された高い福祉基準を要求することもできない。彼らは、バードショーに来て、検査をすることは出来るし、ゆるい福祉基準を取り締まることもできるが、将来、ペットショップよりも高い基準を要求することはできない。多くのペットショップが、基本的なペットショップ免許のコンディションに基づいて経営しているので、残念ながら、多くのペット鳥への福祉基準は下がるだろう。しかしながら、うれしいことに、判決はイギリスの100,000のブリーダーが彼らの鳥をペットフェアを通して売ることの止めるのには何もできない。ブリーダーがビジネスとしてしない限り、彼らは、ペットショップを通じてではなく、フェアで一般市民に彼らの鳥を売ることができる。

同じようにうれしいことに、判決は、行商人から買う衝動買いを、そういう意図はなしに、減らしているかもしれない。これは、同時にブリーダーと企画者に利益を与えることになる。ペットフェアでもっと沢山の鳥がブリーダーから提供されれば、もっと多く、選べるようになる。そして、もっと多くの飼い主がやってくる。彼らは、地域のペットショップで買うよりも、より多く支払う可能性が高い。ペットフェアは毎日行われるわけではないので、それほど真剣でない飼い主は、落ち着く時期がもてるようになる。ウォーカー裁判長が、再審をしなかったのは、ペットフェアが合法だという意味ではなかろうか。政府も同じで、新しい動物福祉法によって、フェアのタイプやサイズによって規制を行うが、禁止をしたり、抑圧することはない。ペットフェアの将来は、いままで以上に明るいのである。

Free flight 自由に飛ぶこと

By CHRIS SHANK, Oregon, USA クリス シャンク オレゴン、USA

コンパニオンパロットは、生まれ持った権利を許されるべきだと、私は思う。つまり、外を自由に飛ぶ権利である。自分のオウム羽はいつも切っておくべきであると頑なに信じている飼い主にとっては、これは、論争の余地のあるものであることは承知の上である。私は、私のコッカトゥー（白色オウム類）を、25年間、外で飛ばせて来た。もちろん、自分なりに難しいことや辛いこともあった。にもかかわらず、外で飛ばして

あげないで置こうと思ったことはない。私にとって、自由に飛ばせてあげることが、私の鳥飼育の延長上にある。私の20羽のコッカトゥーは、皆、野外の大きな鳥小屋にいる。私にとって、その次の理にかなったステップは、その中の何羽かのコッカトゥーを、鳥小屋の外で飛ばすことである。私は、飛ぶことについて殆どトレーニングをされていない最初のコッカトゥー（キバタン Sulphur-crest）を放した。幸運なことに、彼は逃げていかなかった。初めは確信がなかったが、彼は、この27年間、外で自由に飛んでいる。

もちろん、現在、私は、もっといろいろなことが分かっているし、外で飛ばそうとする鳥には、トレーニングをする。以前は、羽を切ることの支持者だった。支持者というと少し強すぎるかもしれない。私の鳥は飛べるようにしながらも、他の人には、オウムの安全のために、羽を切ることを薦めていたのだ。これは、今では、傲慢な見方に思える。なぜ、他の人の鳥は飛ぶと危ないと思ったのだろうか？羽を切っていない私の鳥たちは、羽を切った鳥達同様に、外でも、中でも安全である。一般の飼い主は、オウムが羽を切られずにいられるようなトレーニングをすることが出来ないと思ったのだろうか？自分自身をエリートだとは思わないが、私のアドバイスは、それと反対のことを示唆しているようだ。誰でも、鳥を外で飛ばせることができると支持しているわけではないということを理解していただきたい。

例え、オウムを外で飛ばすことを欲したとしても、すべての飼い主が、オウムを外で飛ばせるとは限らないし、すべてのオウム自身が、外を飛べる候補であるわけでもない。以上を述べた上で、何人かのオウムの飼い主は鳥を外で飛ばすトレーニングを無事終え、そして、彼らのオウム自身が飛べるようトレーニングできたことをよく知っている。これは、専門家によってトレーニングされたオウムが、バードショーで飛ぶことだけに限らないのである。この大変な自由飛翔のトレーニングを終えたものだけが、素晴らしい褒美ともいえる経験をするのであり得るのである。飛翔トレーニングを成功させるためには、トレーニング方法の勉強と、忍耐、一貫性そして、オウムの行動を観察し、理解できる鋭い能力が必要である。これらのスキルは、トレーナーとして、自分の性質の一部になるくらいでなくてはいけない。自由飛翔において、飼い主が、ある基準を満たさなければならぬように、外を飛ぶオウム自身もそうでなければいけない。必要事項は多く、その中には、健康であること、飛ぶ能力があること、きちんとしたトレーニングを受けれること、外の様子や天敵についてよく分かっていることが挙げられる。適切でうまくいったトレーニングの後、飼い主とオウムの関係は、新しいレベルへと高められる。飼い主と、自由に飛んでいるオウムの間の信頼と尊重関係は、鳥の羽を切っている飼い主には分からない高峰へと上っていく。オウムを自由に飛ばせるのは、気軽なことではない。危険と落とし穴が多くある。これを言い過ぎるということはない。しかしながら、これは、飼い主にとって、心臓が踊り、生活が変わってしまうぐらい素晴らしい経験なのである。個人的に、かごやプレイスタンドを離れ、自由に飛ぶ鳥達との関係を築けたのは、特別なことだと感じる。自分のコッカトゥーが、木から舞い降りてくるのを見たり、5羽が木の上で一緒に遊んでいたり、庭いじりをしている時に、一緒にいれるなどのことは、オウムを飼うということに新しい一面をもたらし、それを説明するのは難しい。私は、飛翔のミラクルと私の鳥達の自然の驚きを毎日経験している。

オウムにとっては、自由に飛べることは最高なことである。家の中やカゴの中では、抑制された行動は、外で飛ぶことによって自然に現れる。自分で決断をする、飛びながら考える、太陽、風、雲の下で自由にすること、そして、最高の健康状態を得るのは、自由に飛ぶオウムたちが得れる豊かさのいくつかである。家の外と中で自由に飛ばすことに関しての情報は少ない。オウムを飛ばすことをトレーニングすること自体が少ない。しかし、変化は起こりつつある。肯定的に補強していくトレーニングメソッドのワークショップは、国内でも行われているので、励まされる。現在ある子犬や成犬のクラスに似たような、オウムトレーニングクラスに、オウムの飼い主が行くことが一般的になる日が来ることを、楽観視している。オウムが自由に飛べる世界に人々を導くためのワークショップが行われる日が来ると思う。何が必要で、それ自体が何なのか、そして、それがその飼い主やオウムに向いているかいないかを教えてくれる。オウムのトレーニングが、単なる行動管理や芸当トレーニングを超え、自由に飛べることに移る日が来ることを予想する。このようなことをしたいと欲すし、それを成し遂げられる能力がある者たちに、気軽に行けるようなクラスがあるようになるだろう。経験のある人々や、外を飛べるオウムたちが集まって、飛翔の会を野外や広いビル内で行う日が来ると思う。これが、実は、すでに行われていると知ったら驚く人がいるであろう。最終的に、私の鳥が飛んでいるのを見て「あなたの鳥、どこかに飛んでいっちゃわないの？」ではなく、「私の鳥にさせるために習えるかしら？」という日が来ることを楽しみにしている。

Macaws amuck

By CARI CLEMENTS, Natural Encounters, Florida, USA. Photos By DAN KLEIN 一訳省略一

Psitta News シタニュース

イギリス獣医協会 (British Veterinary Association) は、野鳥輸入の永久禁止を呼びかける動きに加わった。捕獲と輸送中の鳥の福祉を憂い、野鳥の輸入を永久に禁止する立場のステートメントを、イギリス獣医協会 (略 BVA) の会長 フレダ スコット パーク博士 Dr Freda Scott-Park が発表した。貿易での高い死亡率を鑑みて、BVA 議会での論議と、最近の BVA 動物福祉基金 BVA Animal Welfare Foundation (略 BVA AWF) のフォーラムを経て、BVA は、永久的な輸入禁止は不可欠であると信じている。「ペットショップに到達するまでに 60%にもなる死亡率は、他のどの分野でも認められているものでもなく、野鳥貿易でも認められるべきではない」と、スコット パーク博士は言う。鳥インフルエンザの隔離センターでのレポートが、到着時、または、隔離中の死亡率が 12%であることは、この業界では「あたりまえ」と考えられているというレポートを聞いて驚いた」

野鳥の貿易禁止を呼びかけることに加え、ステートメントは、ペット貿易のために人工飼育された鳥への輸入、隔離、そして、識別の規制をより厳しくするべきだという。

「イギリスで売られる殆どは、EU 内で繁殖されたものであるべきである。これは、輸送の間に鳥が受けるストレスによって死ぬ率を下げるのにも役立つ」

飼い主は、どのような種の鳥を購入するか、そして、売り手に、鳥は、人工繁殖であるかをたずねる必要があると促している」

「貿易は、飼い主の要求によって動いており、飼い主が見分けれることによって、彼らが購入する鳥の福祉を向上できる」と彼女は言う。スコット パーク博士によると、政府も大切な役割を果たせると言う。

「第三国からの違法貿易を止めるため、鳥の隔離についてのディモックレポートの薦めるのにしたがって、EU にある隔離センターの状態を安全で効率的にするため、EU との国境警備を強化する必要がある。」政府は、買い手が、違法に密輸された鳥—それは、後に人工飼育だと偽って売られる—ではなく、安心して人工飼育の鳥を買えるよう、より厳しい識別と証明を奨励する必要がある。

さらに詳しい情報は、BVA プレス オフィスにお尋ねください。020 7636 6541 又は media@bva.co.uk.

The FlyAbout 2006 at Cockatoo Downs in Salem, Oregon

オレゴンのセーラムで、コッカトゥー (白色オウム類) のフライアバウト (飛び回り) 2006

“自由に飛ぶ権利—コンパニオン パロットは、自由に自然の中を飛べるようにするべきだという信条のもとに、フライアバウト スクールは創設されました”とフライアバウト 2006 のミッションステートメントには書かれている。しかしながら、多くの飼い主が、オウムの羽を家の中で切っておくことが、唯一の安全な方法だと信じている。このハネを切る人気のある考えとは反対に、適切に飛翔トレーニングを受けたオウム達は、家の中で上手に、そして、安全に暮らすことができる。

この目的のために、オウムの飼い主を彼ら自身の鳥に、ポジティブ レインフォースメントを用いて (出来ればほめる。出来なければ罰するやり方の反対) きちんとトレーニング出来るように 2 日間にわたるセミナーとワークショップを開く。ポジティブ エンフォースメントは、効果的で、飼い主とそのオウムが、信頼関係を結ぶのに役立つ。フライアバウト 2006 は、参加者に、ディスカッション、パワーポイント プレゼンテーション、実際の鳥のデモンストレーションを通して教える鳥飛行トレーナーによるものである。利益の一部は WPT に寄付される。詳しい情報は、<http://cockatoodowns.com/> を参照してください。

スケジュール ——2006 年 10 月 7 日午前 9 時から午後 4 時—バーバラ ヘインデレイク Barbara Heindenreich ポジティブ レインフォースメントについて講義し、実際の鳥を使ったデモ、と観客からの参加を募る。

6 時から 8 時 ディスカッション 10 月 8 日午前 9 時から午後 4 時—野外での自由飛翔についての講義、観客参加、そして、野外のデモンストレーションを行う

Exceptional breeding success 繁殖の成功

By Al Wabra Wildlife Preservation アル ワブラ 野生動物保護

写真は、ワブラ 野生動物保護 Wabra Wildlife Preservation (AWWP) で 2006 年に生まれた、7羽のアオコンゴウインコ (Cyanopsitta spixii) のヒナである。7羽という数字は、世界すべてで生息するアオコンゴウインコの 10%の個体数を意味する。2004 年と 2005 年に生まれたものをあわせると、AWWP は、12羽のアオコンゴウ

インコを繁殖したことになる。すべてのヒナは、人工的に育てられたが、将来は、親鳥に疎雑たれることを望んでいる。将来は、他のつがいの、繁殖し、将来は、インターナショナル保護活動として、ブラジルの自然に帰せることも望んでいる。

Parrot painting donated to support the Patagonian Conure project **パタゴニアインコをサポートするため寄付されたオウムの絵**

芸術家ポール スタイベリ (Paul Staveley) が、ヨウムの絵をワールドパロットトラストで販売してくれるよう描いてくれました。これは、原画ではありませんが、500 コピー限定で、33 ポンド (約 7200 円) で販売中。額なし。そして、パタゴニアインコのプロジェクトを支援するため、オリジナルの油絵を、寄付してくれました。絵は 16 インチ x 20 インチ x 0.75 インチで、額に入っています。金額は、イギリスポンドで、£950.00 (約 20 万円) です。ご興味のおありのかたは、WPT ジャパン今西まで、ご連絡ください。

The Parrot in Art 芸術におけるオウム達 一訳省略一

A note from the US Administrator **US オフィスの事務からのお知らせ**

WPT USA の事務所が、ミネソタから、フロリダに移される間、何かと不自由な中、ご協力をいただき有難うございました。この5ヶ月の間、色々学んでまいりました。メンバーシップを銀行の引き落としに変えていただいた方にもお礼を申し上げます。これは、メンバーシップ更新のお知らせをはがきで送る必要をなくしてくれるので、時間的にも、経済的にもとても、助けになります。簡単な手続きでできますし、変更があれば、即、手配いたしますので、ご安心ください。有難うございました。

WPT USA 事務担当 グレン レイノルズ

Parrots in the Wild - Hyacinth Macaw **Anodorhynchus hyacinthinus**

裏表紙の写真 **スマレコンゴウインコの飛翔**

ブラジル北東部のスマレコンゴウインコの谷で飛ぶ、スマレコンゴウインコの群れ。WPT、ケイティ、トロピカルネイチャー、そして、その他の個人の保護活動によって、スマレコンゴウの数は増えているようだ。実際、スマレコンゴウインコの谷は、スマレコンゴウを写す世界で一番いい写真撮影の場所になった。今西のグループは、平均 40 羽のスマレコンゴウ、ある日には 70 羽以上のスマレコンゴウが、彼らの好きな餌場に、ナッツを食べに来るのを見た。写真：今西 WPT ジャパン

By © Lin Imanishi